

開発途上国と日本、双方の食料事情が安定する支援をしたい

これまで農業分野で多くの国際協力経験を積み重ねてきた宮崎明博さん。現在は、モザンビークで多くの人の笑顔を生み出したいと、農業のほか、環境やインフラ整備も含めた開発の可能性を探り続ける。

地

図に残る仕事をしたい。大学時代は土木工学、特に都市計画や交通計画を研究していたこともあり、そう考えていました。また、自分が楽しく仕事ができ、周りに幸せや笑顔を提供できる仕事にもあこがれていたため、就職先としてテレビ局やレコード会社を考えたこともありましたが、最終的には、その両方の希望がかなえられるのではないかとということで選んだ道がJICAです。

就職して4年目のこと、初めての海外赴任先のメキシコで担当することになったのは、農業分野でした。初めてかわる領域だったので、日本語ですら専門用語が分からない状況に加えて、公用語のスペイン語にも苦労しました。

当時は、必要な知識を専門家から教えてもらいながら、専門書や報告書をとにかく読みあさったものです。また、農作物の試験栽培や研究の過程では、専門家同士で意見が分かれることがあり、プロジェクトの進め方に悩んだこともありましたが、それでも、メキシコで2年3年と経験を積むうちに、農業開発に必要な知識が身につきたり、農業プロジェクトを自らの手で作り上げられるようになりました。当時は実績の少なかつた環境分野のプロジェクトも立ち上げ、大きなやりがいも感じました。その後、2002年から勤務した札幌国際センターでも、農業分野の研修を担当。メキシコでの経験を生かし、研修担当者、時には講師という立場で海外からの研修員に日本の農村振興の歴史やJICAの農業開発について講義し、実際に日本の農業を目で見て、触れてもらうため、圃場へ同行したこともあります。

自分の専門ではないと思っていた農業分野を、メキシコ・札幌と続けて担当し、農業は「見て分かる」、そして作物が実り「形に残る」やりがいのある仕事だと、分かりました。

現在の勤務先であるモザンビークでは、インフラ・農業・環境などさまざまな分野の協力を取りまとめ、国全体が持続的に発展するために必要な日本の支援戦略を考えるのが私の役目です。とりわけ、モザンビーク北部のナカラ回廊開発支援に力を注いでいます。

この地域は、国内でも開発が遅れている地域です。しかし、土壌・水資源などの状況を秘めた地域でもあります。モザンビークが持続的に経済成長を実現するためには、これらの支援は非常に重要だと考えています。ここではブラジルとの連携事業「PRO SAVANNA」※をはじめとして、地域を経済成長させるためにマクロ的な視点から支援の方法を考える必要があります。単一セ



JICAモザンビーク事務所
業務総括・環境・セクター横断
案件担当

宮崎明博
MIYAZAKI Akihiro

大学卒業後、1996年にJICAに就職。社会開発調査部(当時)、メキシコ事務所、札幌国際センター、米国デューク大学への海外長期研修、企画・調整部(当時)、審査部などを経て、2010年3月より現職。

クターでの支援に留まらず、インフラ(道路、橋梁、港)整備、教育、保健、給水、電力エネルギー分野など総合的かつダイナミックな視点と斬新なアイデアを取り組まなければなりません。これはモザンビークだけではなく、道路や鉄道など、線、でつながる隣国マラウイやザンビアにも良い影響をもたらすものと考えています。

一方で、インフラ整備を含め開発事業は少なからず自然環境に影響を与えます。開発と環境保全のバランスを考えることも持続的な発展に必要な要素と信じています。これらモザンビークへの協力は間接的に日本にも裨益すると考えています。例えば、食料自給率がわずかに4割の日本は、途上国を含めた海外からのサポートなしでは生きていけない国です。開発途上国と日本、双方に利益となる「Win-Winの関係」がモザンビークにも築けるよう、JICA、そして日本人として活動することが大事だと考えています。



モザンビーク国家水利局と既存プロジェクトや今後の協力方針について協議

※農業開発を通じて、貧困削減・食料問題の低減・食料安全保障への貢献を目指すプログラム。